

# 蔡英文の台湾と日本の課題



台湾総統就任式典（5月20日）



渡辺利夫

拓殖大学学事顧問

わたなべ としお ●昭和14年、山梨県生まれ。慶應義塾大学経済学部卒、同大学院博士課程修了。経済学博士。専門は開発経済学、アジア経済。筑波大学教授、東京工業大学教授、拓殖大学教授、同学長・総長を歴任。現在、同学事顧問、日本李登輝友の会会長。『成長のアジア 停滞のアジア』『開発経済学』『新脱亜論』『神経症の時代』『放哉と山頂火一死を生きる』など著書多数。第27回正論大賞など受賞歴も多数。

■五月二十日、台湾民進党の蔡英文氏が新総統に就任した。日本では、国民党の馬英九政権とは対照的な親日的な政権が誕生したということで好意的に受け止められている。だが、今後の日台関係のあり方を考える場合、台湾と中国や東南アジアとの関係や、安全保障だけでなく経済の視点も踏まえることが不可欠だろう。

そこで、東アジア経済に詳しい渡辺利夫先生に、そうした広い視点から蔡英文政権誕生の意味と日本の課題についてお話をうかがった。

## 「統一か独立か」はもう古い

—— まずは蔡英文政権の誕生に対するご感想から、お聞かせ下

踏まえれば、大陸との統一など端から問題外なのです。

逆に言うと馬英九は、台湾の民意を外れたことを平然とやって来たわけですね。その典型が、昨年十一月にシンガポールで行った中台首脳会談です。国共分裂後、国民党と共産党のトップが初会談を開いたというところで話題にはなりましたが、台湾は何の成果も得られなかった。むしろ台湾の民意を置き去りにして、双方で統一の意思だけ確認した虚しい「歴史的会談」だったと思います。

その意味で、今度の蔡英文の勝利は、現状維持派の勝利と言ってもいいし、馬英九の自滅と言ってもいい。いずれにせよ、今後は台湾社会の非国民党化、つまり台湾化が、ジャーナリズムや軍部も含めて、着々と進められていくだろうと思います。

## 対中経済依存からいかに脱却するか

—— とはいえ、中国という巨大な存在を考えれば、そう簡単な

課題ではありませんね。  
渡辺 ええ。中国は台湾の非国民党化に対しては恒常的に恫喝を加えてくるでしょうから、今後は台湾海峡の波が高くなると思います。

それを自覚しているから、台湾のマジョリティーは現状維持と言ってきたわけですが、しかし何もしないで現状維持はあり得ません。今後、いろいろ既成の構造を変えていかなければならないわけですが、最大の問題は台湾の対中貿易依存構造からの脱却の成否です。

馬政権は、兩岸経済協力枠組協議（ECFA）と称される自由貿易協定（FTA）を中国と結んで、対中経済関係の制度化に踏み込みました。その結果、台湾の対中貿易・対中投資依存は急速に深まり、いまや輸出は四割、直接投資は八割を超えています。呑み込まれてしまうぐらいのすさまじい依存度です。

この依存によって、中国の成長率が高かった馬政権前半期は、台湾も成長することができたのですが、馬政権の後半期あたりから、

さい。

渡辺 今回の蔡英文新政権の誕生は、何より台湾で民主主義が完全に定着したことを証するものだと思います。一九九六年の台湾初の総統直接選挙で国民党の李登輝氏が総統になって以来、二〇〇〇年には民進党の陳水扁氏、二〇〇八年には国民党の馬英九氏、そして今回は民進党の蔡英文氏と、民主主義を絵に描いたような政権交代が、しかも中華世界の中で実現したのは、まさに画期的なことだと思います。

では今回、なぜ蔡英文が勝ったのか。結論を先に言うと、台湾では世代交代が進み、自分は台湾人だと考える人々が選挙民のマジョリティー（過半数）を占めるようになったからです。言い換えれば、いまや国民党対民進党という従来の対立図式、あるいは統一か独立

かという二項対立の選択がテーマとなるような社会ではなくて来たということです。

それを象徴的に示したのが一年の「ひまわり運動」です。兩岸サービスマイル協定に反対する学生が立法院（国会）に乱入し、そこを二十四日間わたって占拠したのですが、広範な人々の支持があつて、官憲はこれを排除できなかつた。その運動を担ったのが「天然独」世代と言われる若者たちです。「天然独」とは、台湾は自然に独立しているという意味ですが、台湾で生まれ育った若者にはこうした意識が生まれているのです。

ですから、蔡英文総統は就任演説でも、独立とか統一という言葉は一切使わず、現状維持が台湾の民意であるという言い方以外やっています。天然独という民意を